

# 大多喜町女ヶ谷遺跡

—道路特殊改良県道大多喜一宮線埋蔵文化財調査報告書—

平成 8 年 3 月

千葉県土木部  
財団法人 千葉県文化財センター

おお た き おな が やつ

# 大多喜町女ヶ谷遺跡

—道路特殊改良県道大多喜一宮線埋蔵文化財調査報告書—



## 序 文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告書第287集として、千葉県土木部大多喜土木事務所の県道大多喜一宮線道路特殊改良事業に伴って実施した夷隅郡大多喜町下大多喜の女ヶ谷遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、古墳時代から平安時代にかけての集落の一部とみられる堅穴住居跡が発見されるなど、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。この報告書が、学術資料として、また大多喜町や上総地域の歴史を知る資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を始めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成8年3月25日

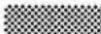
財団法人千葉県文化財センター  
理事長 中村好成

## 凡　　例

- 1 本書は、千葉県土木部大多喜土木事務所による県道大多喜一宮線道路特殊改良事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県夷隅郡大多喜町下大多喜字作畠1223-1ほかに所在する女ヶ谷遺跡（遺跡コード441-001）である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県土木部大多喜土木事務所の委託を受け、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業は、調査研究部長 西山太郎、市原調査事務所長 森尚登の指導のもと、研究員土屋治雄が下記の期間に実施した。

発掘調査	平成7年5月1日～6月13日
整理作業	平成7年8月1日～9月30日
- 5 本書の執筆は、研究員 土屋治雄が行った。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁生涯学習部文化課、千葉県土木部大多喜土木事務所、県立総南博物館、大多喜町教育委員会、浅野栄一氏、清水清二氏の御指導、御協力を得た。
- 7 本書で使用した地形図は下記のとおりである。

第1図 国土地理院発行	1/25,000 「国吉」「大多喜」
第2図 大多喜町土地基本図(6)	1/2,500
- 8 本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。
- 9 周辺空中写真は京葉測量株式会社が平成7年に撮影したものを使用した。
- 10 本書で呼称した遺構番号は、調査時に呼称した番号を使用している。
- 11 挿図に使用したスクリーントーン及び記号の用例は次のとおりである。



焼　土



粘　土

・ 遺物出土地点

## 本文目次

Iはじめ	
1 調査の経緯と方法	1
2 遺跡の位置と環境	1
II 遺構と遺物	
1 調査概要	6
2 壊穴住居跡	6
3 溝と土器捨て場	10
4 14号堀立柱建物跡	12
5 11号焼土土坑	12
6 2号塚	13
7 13号土坑墓	13
8 その他の遺構	15
9 遺構出土遺物	16
III まとめ	18
報告書抄録	卷末

## 挿図目次

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡(1/25,000)	2	第13図 1号溝出土遺物	11
第2図 遺跡周辺の地形図(1/2,500)	3	第14図 6号土器捨て場出土遺物	11
第3図 女ヶ谷遺跡遺構配置図(1/200)	5	第15図 14号堀立柱建物跡実測図	12
第4図 10号壊穴住居跡実測図	6	第16図 11号焼土土坑実測図	13
第5図 10号住居跡カマド実測図	7	第17図 2号塚実測図	14
第6図 10号住居跡出土土器	7	第18図 2号塚出土石製品	14
第7図 9号壊穴住居跡とカマド実測図	8	第19図 13号土坑墓実測図	15
第8図 9号住居跡出土遺物	8	第20図 13号土坑墓出土遺物	15
第9図 8号壊穴住居跡とカマド実測図	9	第21図 その他の溝・土坑(1)	16
第10図 8号住居跡出土遺物	9	第22図 その他の遺構(2)	17
第11図 15号壊穴住居跡とカマド実測図	9	第23図 遺構出土遺物	17
第12図 1号溝、6号土器捨て場実測図	10		

## 表 目 次

第1表 銭貨計測表 ..... 15

## 図版目次

図版1 遺跡周辺航空写真

図版5 9号・6号・2号・2A-98・3A-56出土遺物

図版2 遺跡遠景・10号・9号竪穴住居跡全景

図版6 2号・1A-97・6号・13号・2A-15・1号・

図版3 8号・15号竪穴住居跡・1号・6号全景

9号・3A-17出土遺物、調査終了後遠景

図版4 14号・11号・2号・13号・5号・4号・12

号・3号全景

# I はじめに

## 1 調査の経緯と方法

県道大多喜一宮線は、夷隅郡大多喜町と長生郡一宮町を結ぶ県道である。郡境は江戸時代には馬も引き返したという言い伝えのあるほどの丘陵になっており、駒返しという地名も残っている。そのため道は細くカーブも急なため、千葉県土木部大多喜土木事務所は道路特殊改良事業を計画し、事業地区内に所在する女ヶ谷遺跡の埋蔵文化財の取扱いについて関係諸機関と協議した結果、記録保存の措置を講ずることとなり、平成7年5月から財団法人千葉県文化財センターが発掘調査を実施することになった。

発掘調査は、平成7年5月から6月まで行われ、520m<sup>2</sup>の本調査を実施した。地山が岩盤のため旧石器時代を対象とする下層の調査は行っていない。

県道から調査区までは、比高差約30mの急崖に面し、バックホー等の機械の搬入が困難かつ危険であるため、表土除去は全域人手によって行った。土層の堆積状況の把握のため、幅50cmのトレチを東西に3本入れた。この結果、表土の厚さは南に厚く約15cmから40cmであった。表土除去終了後、全域の精査及び遺構検出に移行し本調査を実施した。発掘区の設定は、国土地理院国家座標を基準とし、20m×20mの方眼の大区画（グリッド）を東西2区画、南北3区画設定し、西から東に向かってA・B、北から南にむかって1・2・3とし1A、2Bのように呼称した。さらに、大グリッド内を2m方眼の小区画（グリッド）に分割し、西から東へ00(区)・01(区)・・・09(区)、北から南へ00(区)・10(区)・・・09(区)とした。したがって、各々の小グリッドは、1A-00、2B-50、3A-55などと呼称した。はじめの2桁が大区画（大グリッド）を、後の2桁で小区画（小グリッド）を表し、調査区内での位置を表せるようにした。遺構番号は、調査順に1号跡、2号跡のようにした。遺物の取上げについては、遺構に伴って出土したものは遺構内の通し番号で、包含層の遺物については2m×2mのグリッドごとに取り上げた。

## 2 遺跡の位置と環境

### (1) 遺跡周辺の地理的環境

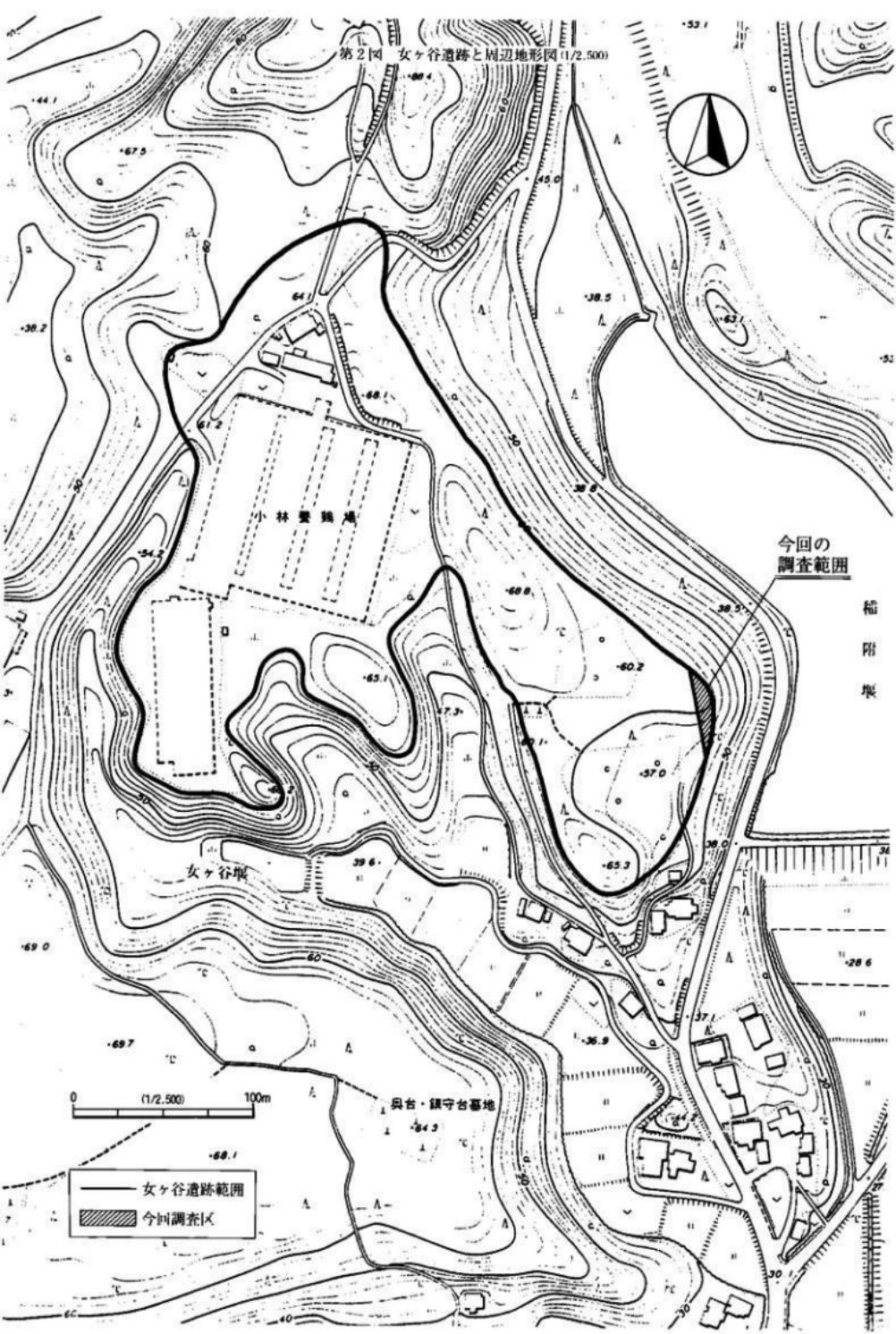
女ヶ谷遺跡は、夷隅郡大多喜町の北端、上澤地区下大多喜字作畑に所在し、標高は、約56mである。全長65km、千葉県第4位の二級河川である夷隅川中流北岸に位置する。夷隅川は、勝浦市を水源とし、蛇行を繰り返しながら大多喜町、夷隅町を通り岬町で太平洋へ注いでいる。川沿いには、河川により形成された氾濫原を伴う広い河岸段丘（沖積地）が形成されている。この沖積地に、北側から張り出している南向きの丘陵地のほぼ先端の東側に位置するのが女ヶ谷遺跡であり、夷隅川に流入する駿遊堂川と高谷川という二本の小河川に挟まれている。遺跡北側は、標高90mほどの丘陵がつづいており、南側に広い水田面が広がる。

千葉県では国庫補助を受けて、4か年計画で県内全域の埋蔵文化財分布調査を実施し、昭和62年度に安房夷隅地区について調査を実施した。また、この資料をもとに夷隅郡教育委員会は、平成2年度に国県の補助を受けて分布調査を行っている。その結果、女ヶ谷遺跡は、畑等に土器の散布がみられ、1基の方形塚のほか20基の塚群も確認され遺跡と認定された。女ヶ谷遺跡の面積は、85,000m<sup>2</sup>で、今回調査を行った

第1図 女ヶ谷遺跡の位置と周辺の遺跡



第2図 女ヶ谷遺跡と周辺地形図 (1/2,500)



地区はその東端に当たり、面積520m<sup>2</sup>、遺跡全体の約0.6%に当たる。

## (2) 遺跡周辺の歴史的環境

大多喜町には、平成3年の時点で合計163の遺跡が確認されている。時代別の内訳は、先土器時代2遺跡、縄文時代101遺跡、弥生時代12遺跡、古墳時代41遺跡、奈良平安時代23遺跡、中近世遺跡43遺跡であり、そのうち古墳は47基が確認されている。内訳は、前方後円墳2基、円墳45基である。また、同じ古墳時代の横穴古墳（横穴墓）は、41基である。中近世の塚は、77基である。このように多くの遺跡、遺構が所在しているが、発掘調査が行われた例は少なく、昭和20年代に3件と昭和50年代に5件となっている。

### ア、先土器時代

旧石器が出土しているのは町内で3か所である。女ヶ谷遺跡と境界を接する台遺跡の発掘調査でナイフ形石器を、また遺跡から2km南の森宮地区において工事中に地表から約2mの位置で石刀と石斧が出土している。泥岩ブロックの混じるローム層の中からであった。

### イ、縄文時代

縄文時代では、中後期を中心に遺跡が分布している。周辺の遺跡には、市場台、横山白山台、台、寺ノ台、船子、堀之内上の台などの遺跡が知られる。主な遺物では、市場台遺跡で土偶など、横山白山台遺跡では石棒など、船子遺跡では石棒、土偶、土版などが表面採集されている。発掘調査の行われた堀之内上の台遺跡では石剣、石棒、土偶14個体のほか竪穴住居跡も検出されている。

### ウ、弥生時代

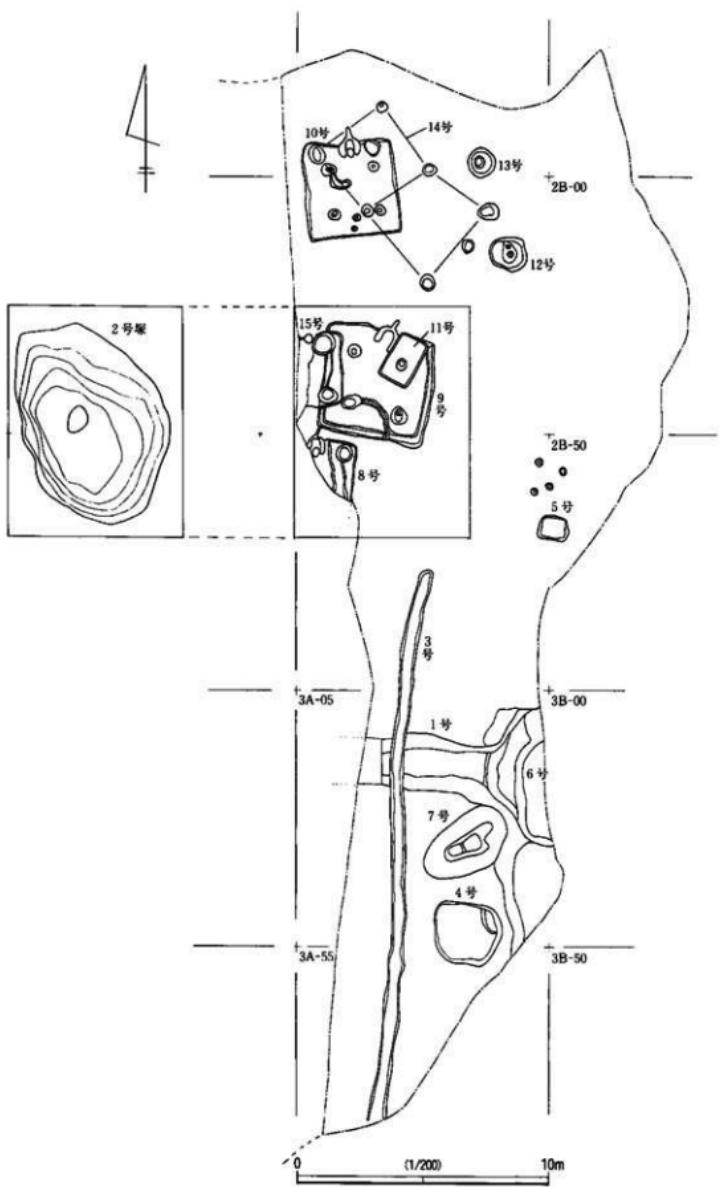
弥生時代の遺跡は少ない。主な時期は中後期であり船子、台、横山白山台、打岡台などの遺跡が知られている。船子遺跡の大部分は県立大多喜女子高校の敷地になる。昭和43年に3個体の須和田式土器が出土している。台遺跡では、発掘調査で中期後半の宮ノ台式土器のほか竪穴住居跡、また、横山白山台遺跡、打岡台遺跡でも弥生時代後期の竪穴住居跡が8軒検出された。

### エ、古墳時代

周辺には、台、高谷、打岡台、愛宕山、横山峰の台などの古墳群がある。町全体では、前方後円墳2基、円墳45基が確認されているが、1基を除く46基は女ヶ谷遺跡のある上澤地区に集中している。女ヶ谷遺跡の南側にある台古墳群2号墳では、昭和13年に白銅製の画文帶環状乳神獸鏡（半円方格帶神獸鏡）が出土している。この鏡は、銘文入りの鉄剣を出土した埼玉県福山古墳出土の鏡と同じ鋳型でつくられた同範鏡であることが確認されている。全国でも5例のみという希少な鏡である。この時代の住居跡（集落跡）は、打岡台、横山白山台、市場台遺跡でみつかっている。市場台遺跡では、1辺9mの大型の住居跡が検出され、同時に甕、鐵鎌、刀子などが出土した。

### オ、歴史時代

横山堀之内、八声カナクソ遺跡では、鍛冶跡がみつかっている。市場台、打岡台遺跡でも発掘調査で鉄滓が出土している。集落跡は今回の女ヶ谷遺跡が初めてである。また谷をはさんだ東側には城の腰城跡がある。



第3図 女ヶ谷遺跡遺構配置図

## II 遺構と遺物

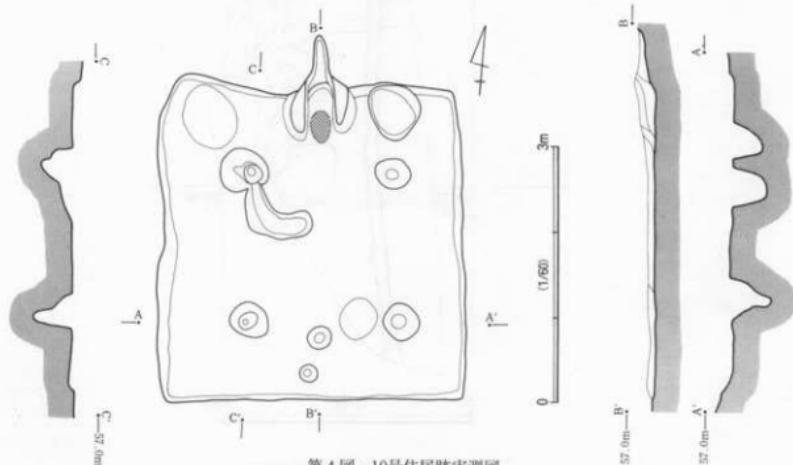
### 1 調査概要（第3図）

検出した遺構は、竪穴住居跡4軒、土器捨て場遺構1基、掘立柱建物跡1棟、塚1基、土坑5基（焼土を伴うもの1、墓1を含む）、溝2条であった。4軒の竪穴住居跡のうち3軒は住居跡どうしが重なり合っていた。またもう1軒も掘立柱建物跡と重なっている。密集した集落跡の存在が予想される。調査区外に住居跡がのびたため完掘できた住居跡は2軒のみである。いずれもカマドのある正方形の住居で、古墳時代後期から奈良時代の住居跡1軒、平安時代の住居跡3軒である。調査区南半部で検出した溝や土器捨て場跡も集落に関連するものである。焼土土坑は中世のものである。塚、土坑墓は近世に帰属する。ほかに溝1条、土坑4基を検出したが時期、性格を断定する遺物は得られなかった。

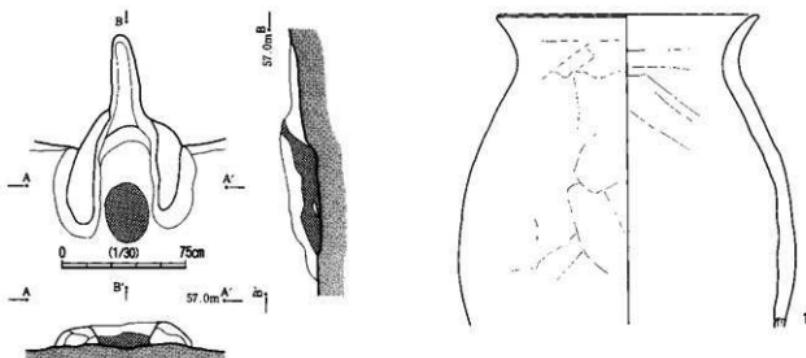
### 2 竪穴住居跡

#### 10号竪穴住居跡（第4、5、6図）

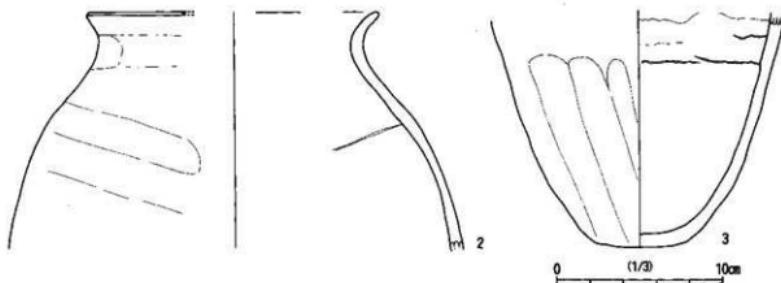
調査区の最も北に位置し、平面形がほぼ正方形の竪穴住居跡である。東辺3.6m、西辺3.8m、北辺3.45m、南辺3.55mである。検出面からの深さは22cmで、主軸はほぼ南北方向を向く。14号掘立柱建物跡と重なっている。当住居跡の方が古い。主柱穴は4個で、床面からの深さは33cm～40cmを測る。南辺側中央に入口ピットがあり、深さは19cmである。カマドは、北辺中央に位置し北東隅に貯蔵穴を有する。壁周溝はなく、床面の硬化は認められない。出土遺物は少なく、原形をうかがい知れるものは3個体のみである。遺物1は住居跡南側から出土した土師器の壺で復元口径17.8cm、胴部にヘラケズリ調整が見られる。2は住居跡南側中央から出土した土師器の壺で、復元口径17.8cm、胴土には石粒を含み胴部にヘラケズリ、口



第4図 10号住居跡実測図



第5図 10号住居跡カマド実測図

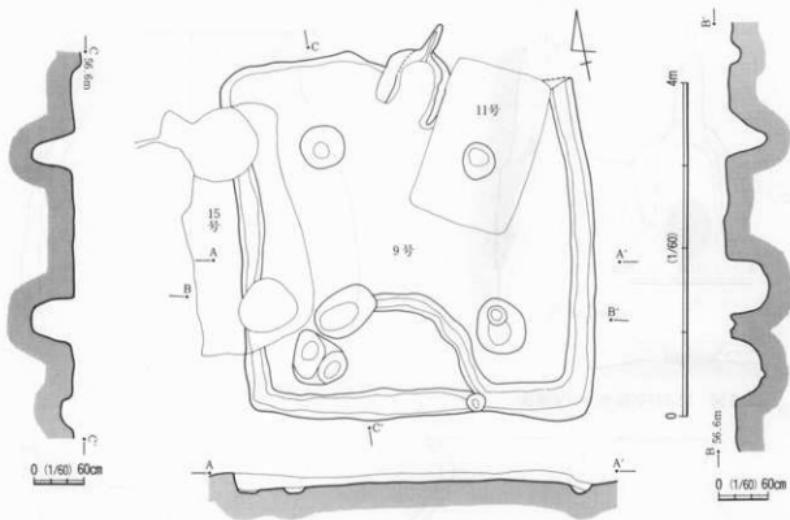


第6図 10号住居跡出土土器

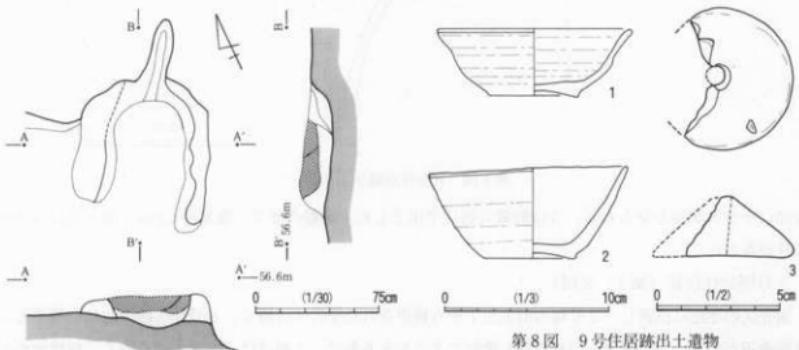
縁部にナデの調整が見られる。3は貯蔵穴周辺で出土した土師器の壺で、底部径4.0cm、胴下部にヘラケズリがみられる。

#### 9号堅穴住居跡（第7、8図）

調査区の北部に位置し、2号塚の旧表土下から検出された堅穴住居跡で、8号住居跡の北に位置する。東西南辺が4.1m、北辺4.4mのやや押し潰れたような正方形で、主軸はほぼ南北方向を向く。検出面からの深さは7.4cmである。西側で15号住居と重複しているが、当住居跡が古い。主柱穴と考えられる柱穴は4個で、床面からの深さは45cm~47cmで、壁周溝は北辺を除き「コ」の字形にめぐっている。踏みしめ等による床面の硬化は見られない。カマドは北辺中央に位置するが、主軸は北東に傾いている。カマド東側袖は11号土坑により半分割り取られている。出土遺物1は、覆土中から出土した土師器の壺であり、口径10.6cm、高さ4.0cmで口縁部の一部を除き原形に復元できた。内外面ともロクロによるナデで調整し、底部は回転糸切りの痕が見られ、表面はなめらかで器壁は堅い。2は床面近くから出土した土師器の壺であり、復元口径12.2cm、高さ5.5cm、磨耗しているが、内外面にロクロによるナデ整形がされ胎土に石粒を含む。底部に回転糸切り痕が見られ、色は明褐色である。3は南辺壁際から出土した土製紡錘車で直径5.6cm、高さ2.5cmである。他は小破片であり図示できるものはない。



第7図 9号竪穴住居跡(上)カマド実測図(左下)

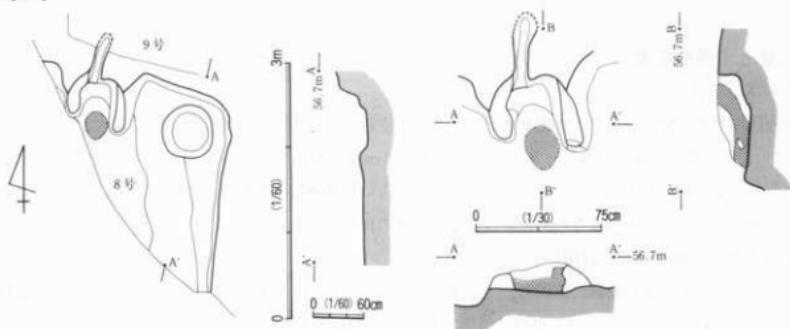


第8図 9号住居跡出土遺物

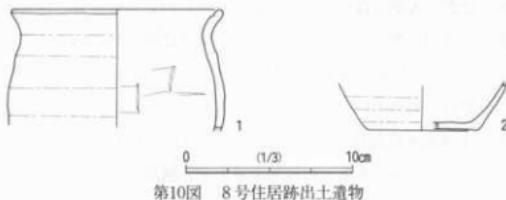
#### 8号竪穴住居跡（第9、10図）

調査区の北部に位置し、2号塚跡の旧表土下から検出された竪穴住居跡で、遺構の大半は調査区外である。調査できたのはカマドを含む北東側コーナー周辺である。カマドの煙道部が9号住居の南辺と重なっている。9号住居が使用されなくなり、埋まってから当住居が建築されたものと思われる。住居の主軸の向きはほぼ南北である。確認できた南北辺は2.1m、東西辺2.0mで北東側コーナーからカマドの中心までが1.5mであることから、推定3m四方の隅丸方形の平面形をしていたと見られる。床面はほぼ水平で、踏みしめ等による硬化面は見られない。北東隅に貯藏穴を有する。カマドは、北辺中央に、砂を含む地山の黄褐色土で構築されている。カマドの東側袖先端部に、袖補強材として高さ22cm、幅15cm、厚さ4.5cmの板状に整形した泥岩を使用している。遺物は北東隅から多く出土した。遺物1は土師器の甕で、復元口

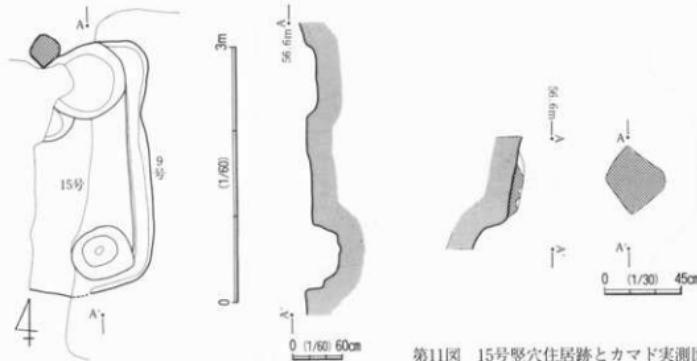
径12.6cm、口クロ整形後、外面は横ナデ、内面はヘラケズリ後ナデで調整している。2は土師器の坏で、復元底部径6.6cmで、口クロ整形し、底部は回転糸切り痕が観察される。他は小片であり図示できるものはない。



第9図 8号堅穴住居跡とカマド実測図



第10図 8号住居跡出土遺物



第11図 15号堅穴住居跡とカマド実測図

### 15号堅穴住居跡（第11図）

調査区北部に位置し、2号塚跡の旧表土下から検出された3軒の住居のうちの1軒であり、9号住居調査中に検出された堅穴住居跡である。遺構の1/2は調査区外のため未調査である。東辺2.8m、確認できた南北辺は、1.4m、推定一辺2.8mの隅丸方形の平面形をもつと見られる。床面は、ほぼ水平で、踏みしめ等による顕著な硬化は確認できない。北東隅と南東隅に貯藏穴があり、壁周溝は、東辺のみに掘られていて

る。東辺から推定し、住居の向きは、南北方向と思われる。北辺中央にカマドのものと思われる焼土の堆積が見られるが、カマド本体は確認できなかった。遺物は土器片を出土しているが、いずれも小破片であり図示できるようなものはない。

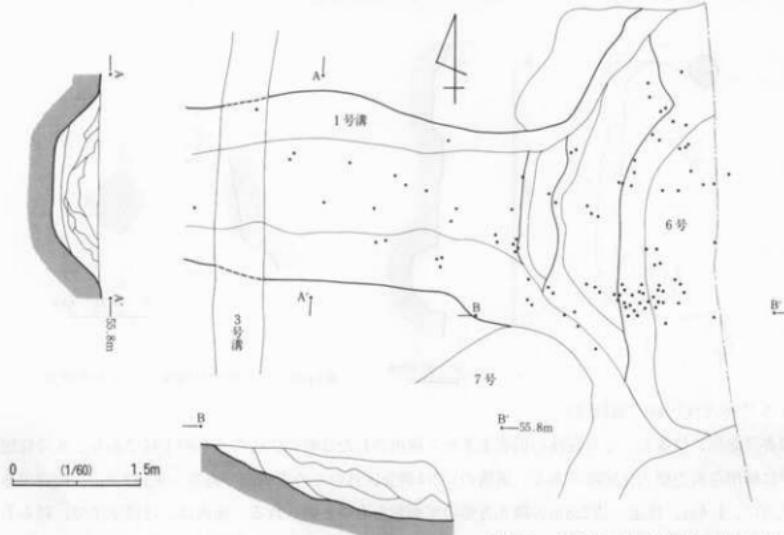
### 3 溝と土器捨て場

#### 1号溝（第12、13図）

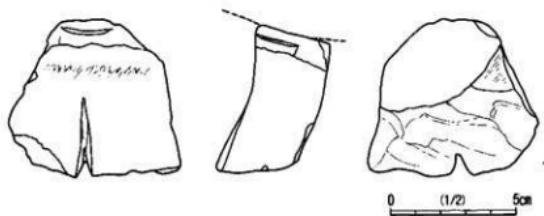
調査区南部から検出された、断面が逆台形の東西に直線にのびる溝で、溝幅は上部で最大2.23m、下部で1.1m、深さは、最深50.4cmで、底面は西から東に3cm深くなっている。西側の調査区外にも続いていると思われる。6号と重なっているが、1号溝の方が古い。遺物は土器片を多く出土しているが1以外は小片であり図示できるものはなかった。遺物1は高環の脚部と思われる。

#### 6号土器捨て場（第12、14図）

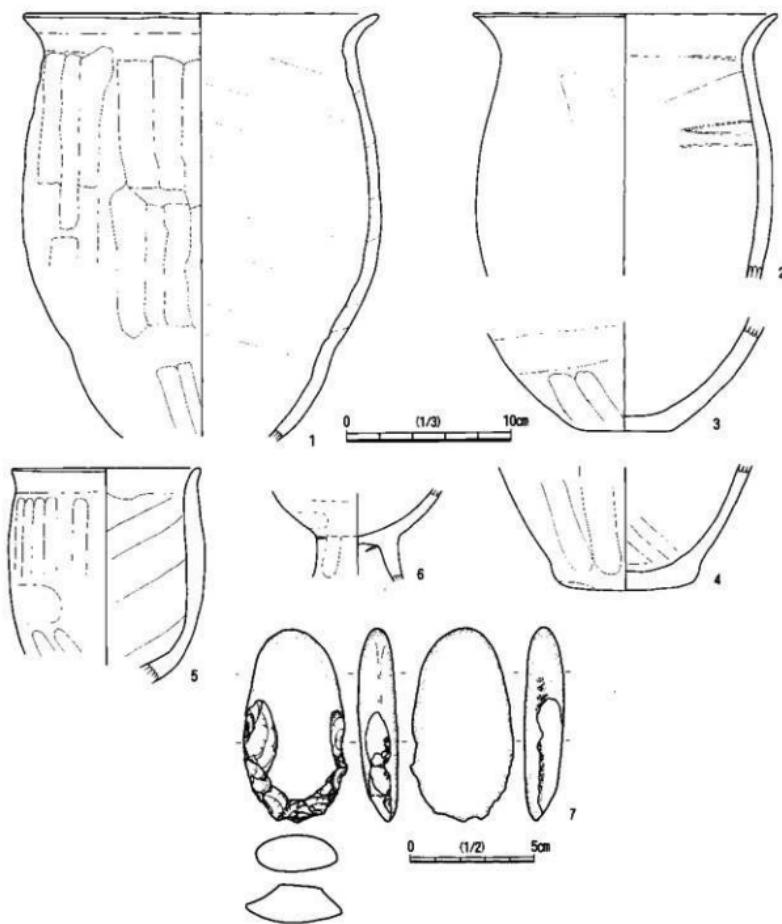
調査区南部の1号溝の東側に位置し、1号溝と重なっている。6号土器捨て場の方が新しい。底面は東に向かい徐々に深くなっている、東端は急崖である。南北幅5m、東西幅2.35m、最大深0.7mの土器捨て場跡である。遺物は全体的に分布していたが南側に集中箇所が見られた。出土遺物点数は、546点で今回調査遺構中最多であったが、大部分は小片であり原型をうかがい知れるものは次の7点である。出土遺物1～4は、土師器甕、5は小形甕、6は高環で、内面が黒色に塗られている。7は石斧である。1は復元口径21.4cm、高さ25.0cm、色は灰褐色、胴部と内面にヘラケズリ、胴部にすすの付着が見られる。2は復元口径18.3cm、遺存が悪いが内外面にヘラケズリが見られた。3は底部のみであり復元底部径が5.4cm、すすの付着がみられる。4は復元底部径が8.3cm、底部と周辺に火熱を受けた痕が見られる。5は底部を欠くが復元口径11.4cm、高さ12.7cmである。口縁部を横ナデ、胴部、内面にヘラケズリが見られ、胴部の



第12図 1号溝と6号土器捨て場実測図



第13図 1号溝出土遺物



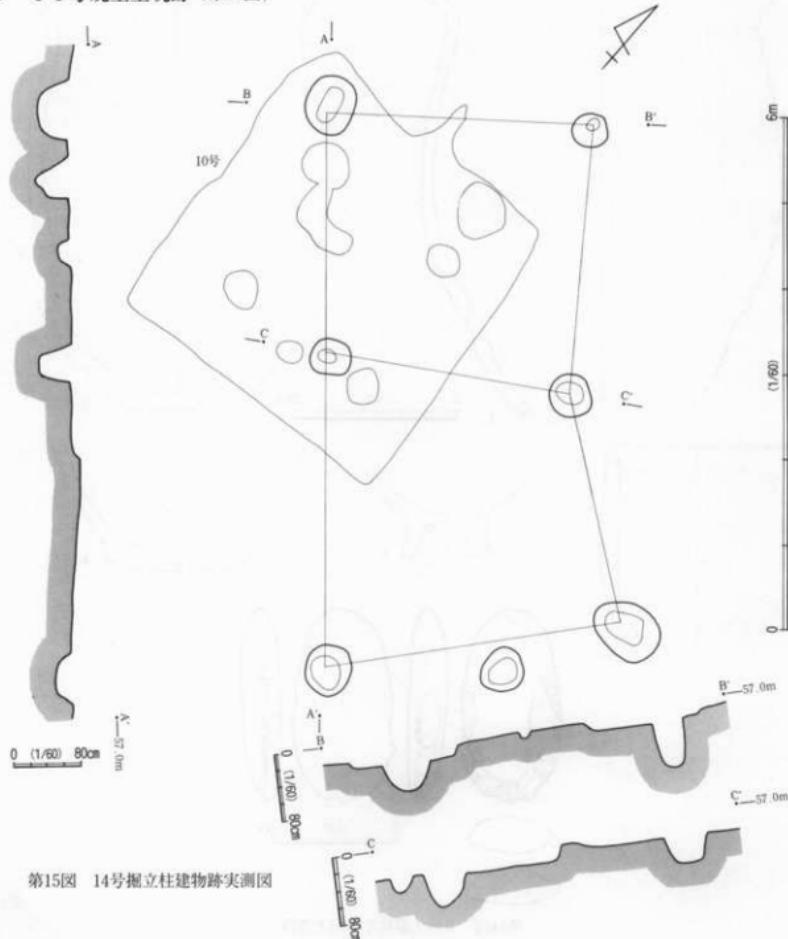
第14図 6号土器捨て場出土遺物

一部に火熱を受けている。7は縄文時代の石斧であり、長さ7.6cm、幅4.1cm、調査区外からの混入と思われる。

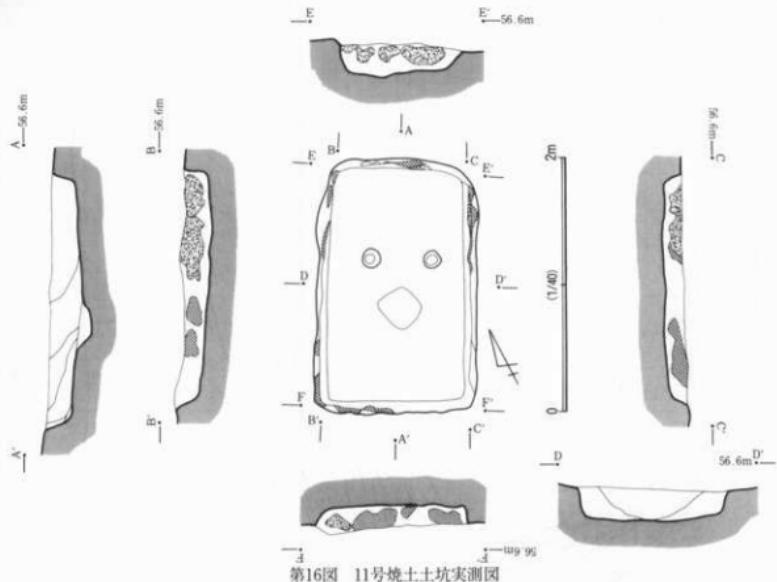
#### 4 14号掘立柱建物跡（第15図）

調査区北端に位置する間口1間×2間、柱間の距離3.2m～3.7m、柱穴の深さが42cm～60cmの掘立柱建物跡であり、10号住居跡と重なっている。10号住居跡より新しい。遺物は柱穴内から土器の小片1点のみ出土した。

#### 5 11号焼土坑跡（第16図）



第15図 14号掘立柱建物跡実測図



第16図 11号焼土土坑実測図

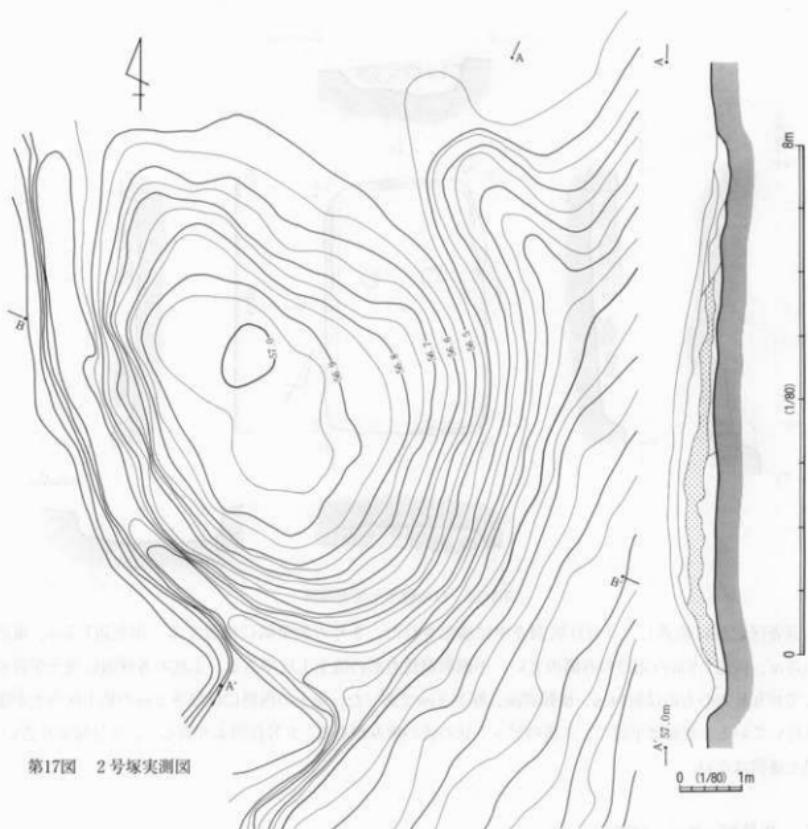
調査区北部に位置し、9号住居調査中に検出された。9号の北東隅に位置する。南北辺1.3m、東辺1.75m、西辺1.9mの北辺のみ隅の丸い、平面形が長方形の焼土土坑である。土坑の各壁面に焼土が付着しており最大のものは縦14cm、横幅37cm、厚さ5cmであった。焼土の内側には厚さ2cmの粘土状の土が張り付いている。底面は平坦で、2基のピット状の浅い窪みがある。9号住居より新しく、2号塚より古い。出土遺物はない。

## 6 2号塚（第17、18図）

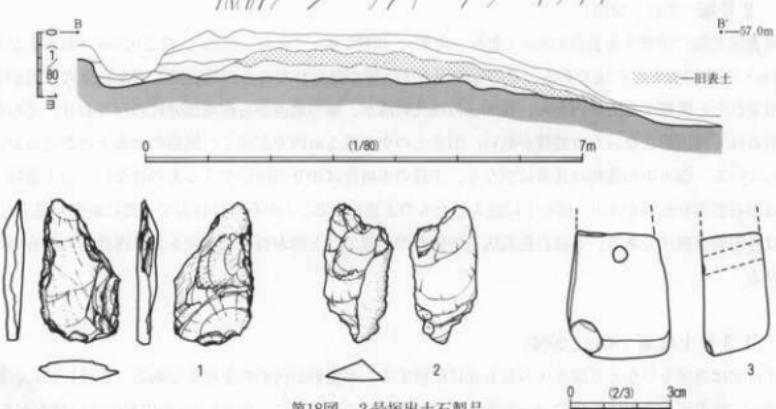
調査区北部に位置する長径8.8m（北西—南東）、短径5.8m（北東—南西）、高さ0.5m（旧表土からは0.3m）の楕円形をした塚である。この塚の旧表土（塚が造られたころの地表面）下から竪穴住居が3軒検出された。隣接する山林内から、幅50cmの現代の溝が、塚の北西から南東部分にのびており、そのために削られて楕円形になった可能性が高い。旧表土の中央部2m四方が高く、周辺の旧表土はなだらかに下がっている。盛土中の遺物は非常に少なく、土器の小破片ばかりで図示できるものはない。出土遺物1、2は旧石器の可能性があり、盛り土に混入したものと思われる。1の石材は頁岩で一部に磨痕が見られる。2は砂岩製の剥片である。3は白色凝灰岩の砥石の一部で、上部が折れた後穴をあけ再使用したものと思われる。

## 7 13号土坑墓（第19、20図）

2m北は急崖をひかる調査区の最も北に位置する。平面形が円形の土坑墓である。長径1.15m、短径1.05m、検出面からの深さは67.0cmであり、底面中央やや西よりに、深さ8.7cmの円形の浅い窪みがある。



第17図 2号墳実測図



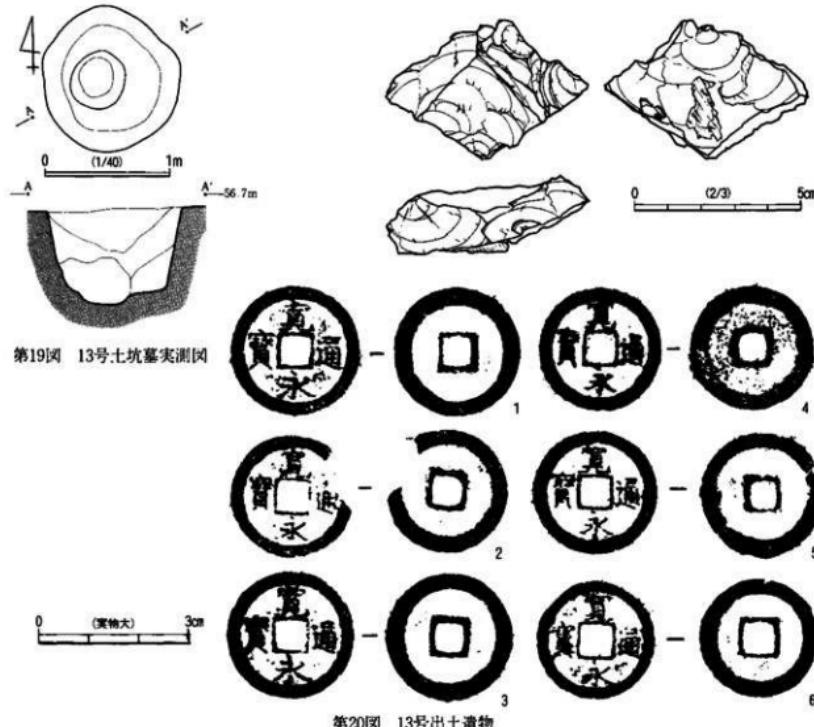
第18図 2号墳出土石製品

底面近くから寛永通宝6枚とさびの付着したメノウ製の白色の菱形状の石1点、木棺の一部及び骨片を出土した。近世の座棺墓と思われる。

### 8 その他の遺構(第21、22図)

#### 3号溝

調査区の中央部から南部にかけてほぼ南北に直線にのびる、長さ43.5mの溝である。上端幅50cm、下端幅30cm、底は南に行くに従って深くなっている。高低差は65cmある。遺物は土師器片11点のみで、図示できるような遺物はなかった。



第19図 13号土坑墓実測図

第20図 13号出土遺物

第1表 錢貨計測表

	錢貨名	重さ g	外縁厚 mm	外縁外径 mm	外縁内径 mm	内部外径 mm	内郭内径 mm	備考
1	寛永通寶	3.18	1.00	25.70	20.60	7.30	6.00	
2	寛永通寶	(2.50)	(1.05)	(24.50)	(19.50)	7.45	6.20	一部欠損
3	寛永通寶	3.49	1.00	25.40	20.55	7.20	6.05	
4	寛永通寶	3.29	1.13	24.70	19.60	7.20	5.85	
5	寛永通寶	2.20	0.92	23.65	19.30	7.50	6.35	
6	寛永通寶	3.00	1.17	24.55	19.50	7.20	5.95	

#### 4号土坑

東側が0.5mで急崖に接する調査区南東部に位置する。南北2.37m、東西2.6m、検出面からの深さ19cmで、平面形は、南にやや狭くなる隅丸方形である。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は、確認面の土と非常によく似ている。遺物は出土していない。

#### 5号土坑

調査区中部東側に位置する、深さ70cmの東西に長い長方形の土坑である。南北幅0.92m、東西幅1.16m、四隅は、ほぼ直角である。遺物は出土していない。

#### 7号土坑

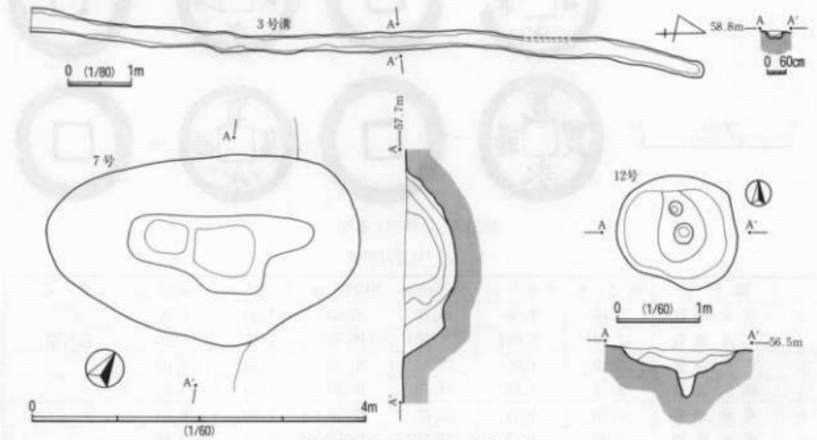
調査区南部に位置し、東西幅3.75m、南北幅2.2m、深さ1.24mの不整梢円形をした土坑である。遺物は出土していない。

#### 12号土坑

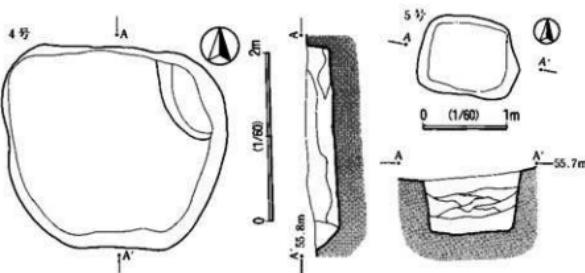
調査区北東部の2A区に位置し、長径1.4m、短径1.3mの不整円形をした土坑である。掘込みは浅く、断面は碗状をしており、検出面からの深さは25cmである。底面のほぼ中央に2基のピットがあり、底面からの深さは北側ピットが39cm、南側ピットが33cmである。出土土器片は2点で、いずれも小片であった。

### 9 遺構外出土遺物（第23図）

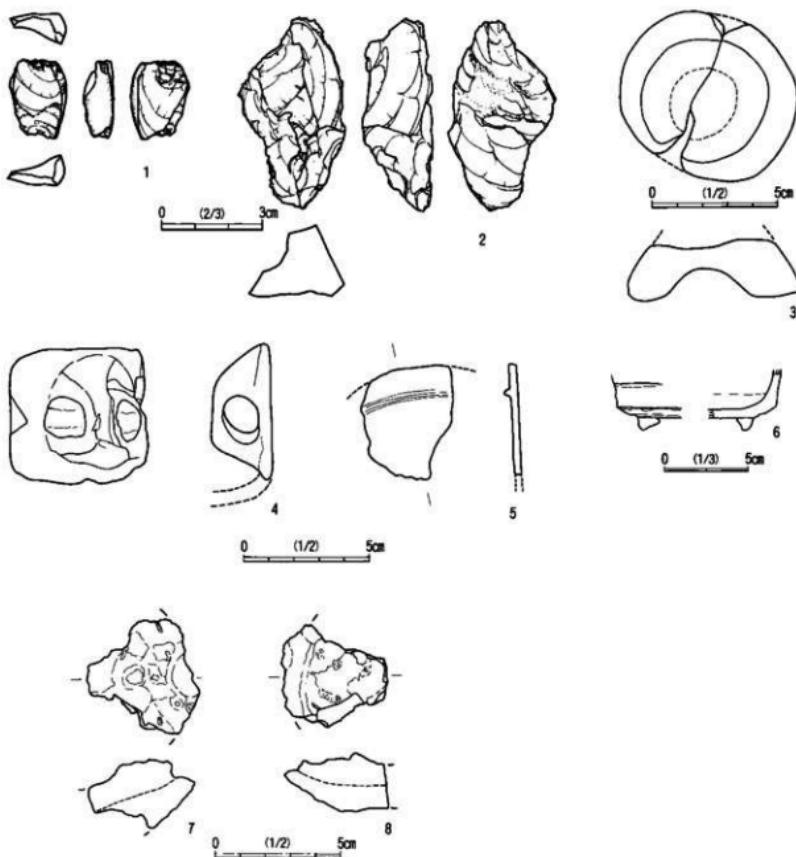
1は2A-15出土の頁岩製の楔形石製品で、縦2.3cm、横1.7cmを測る。2は1A-97出土のメノウ製の剥片で縦5.6cm、横3.2cmを測る。3は3A-17出土の支脚形土器製品で、上部が欠損したものと思われ、下部の長径7.0cm、短径6.3cmである。4は3A-56出土の内耳鍋の取っ手部である。5は2A-16出土の鉄製品の一部であるが、性格は不明である。6は2A-98出土の灰釉陶器の香炉の下部である。7は2A-49出土の楕円形甃であり、一部に段が認められ、2度の操業の可能性があるが明瞭ではない。炉床の様相も不明瞭である。8は2B-31出土の炉底甃であり、外周に段が認められ2度の操業が考えられる。底部は炉床の様相をよく残している。



第21図 その他の溝・土坑(1)



第22図 その他の遺構(2)



第23図 遺構外出土遺物

### III まとめ

大多喜町埋蔵文化財分布地図では、女ヶ谷遺跡は土師器の散布のみられる古墳時代の遺跡とされているが、今回の調査で、古墳時代から平安時代の集落跡であることが明らかとなった。奈良、平安時代の集落の発見は町内はもちろん郡内でも初めてとなる。

今回の調査区は遺跡の東端に位置し、東側は高低差20m～30mの急崖であり、調査区も南北幅40m、東西幅15mと狭かったにもかかわらず古墳時代から平安時代にかけての竪穴住居が4軒検出された。いずれも北辺中央にカマドを備えていた。3軒は2号塚の盛土に保護され後世の破壊を受けず残ったものである。この4軒は、あえて崖際を選んで住んだと言うよりは、女ヶ谷遺跡に営まれた集落の東の端の住居と考える方が自然であろう。85,000m<sup>2</sup>の面積をもつ遺跡の西に広がる集落はかなり大規模のものと推定される。

調査区南で検出された6号土器捨て場跡も西側の集落の存在、規模を暗示する。6号土器捨て場跡は今回調査区中最多の土器を出土した。他の遺物はほとんど出土しなかった。崖の他の場所からは土器捨て場は検出されなかったので、捨て場が決められていたと考えることもできる。また、住居跡付近で製鉄を行った時にて鉄滓が2点出土している。調査区外で製鉄が行われていた可能性がある。資料が少ないため時期は不明である。今後の調査成果が期待される。

2号塚は、調査前から盛り土状の高まりが確認されていたものである。塚に関係する遺物が出土しなかったため時期は不明だが、女ヶ谷遺跡内には20基の近世のものとされる塚群が存在することもあり、近世の塚である可能性が高い。古老の「まわりにもこんもりしたのがいくつかあった。」と言う話もあったので別の塚群が存在した可能性もある。

最も北の崖際から検出された13号土坑墓は、底面近くから寛永通宝6枚、骨片、木桶片（女性か）、さびの着いた白色の菱形状のメノウ製の石（火打石と火打ち金か）が見つかり、形から近世の座棺墓と推定される。遺跡周辺の墓地の一一番古い墓碑は明和8年（1711）である。この年以降は墓地に埋葬されたと考えれば、土坑墓の年代は江戸時代中期以前となる。また明和8年以前も墓地に埋葬していたと考えると、別の理由を考えなければならないだろう。調査区のすぐ近くを古道（一の宮道）が通っており、大多喜城2代城主本多忠朝の時期まで大名行列も通行していた。そして江戸初期から駒返トンネルや県道大多喜一宮線開通（昭和初期）まで長生郡とを結ぶ主要道路として機能していた。かなり多くの人の往来があったであろう。何かの事情でなくなった人を村の人が手厚く埋葬したとも考えられる。検出場所が丘陵地の北のへりという普通ではない状況であることから考察してみた。



遺跡周辺航空写真

1. 女ヶ谷遺跡

2. 市場台遺跡

3. 横山堀之内遺跡

4. 台古墳群

5. 台遺跡

6. 高谷古墳群

7. 打岡台古墳群

8. 打岡台遺跡

9. 横山白山台遺跡

10. 愛宕山古墳・横穴群

11. 船子遺跡

写真図版 2



女ヶ谷遺跡遠景



10号竪穴住居跡検出状況



9号竪穴住居跡  
左側 15号住居  
左下 8号住居  
遠景 10号住居



8号カマド右袖の泥岩

8号竪穴住居跡



15号竪穴住居跡

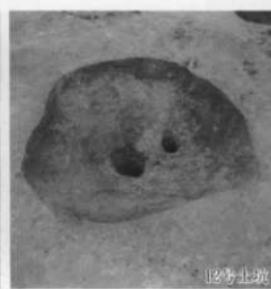
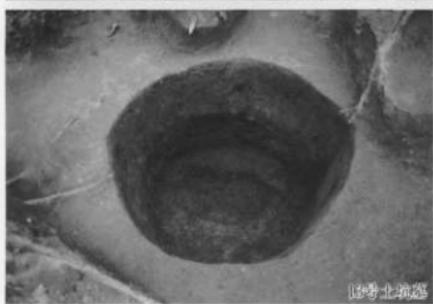


1号溝及び6号土器捨て場跡



6号土器捨て場土器出土状況

写真図版 4





9号住居出土坏



9号住居出土坏



6号出土甕



6号出土甕



2号出土砥石



2A-98出土香炉片



3A-56出土内耳土器片

写真図版 6



2号出土剥片



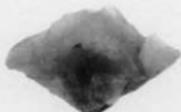
2号出土剥片



1A-97出土石製品



6号出土石斧



13号墓出土石製品



2A-15出土



1号出土土製品



9号出土紡錘車



3A-17出土土製品



調査終了後の女ヶ谷遺跡

## 報告書抄録

ふりがな	おおたきまちおながやついせき						
書名	大多喜町女ヶ谷遺跡						
副書名	道路特殊改良県道大多喜一宮線埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告						
シリーズ番号	第287集						
編著者名	土屋治雄						
編集機関	財団法人 千葉県文化財センター						
所在地	〒284 千葉県四街道市鹿渡809-2 TEL043-422-8811						
発行年月日	西暦 1996年3月25日						

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所 在 地	コ ー ド		北 緯	東 経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
女ヶ谷遺跡	千葉県夷隅郡 大多喜町下大多喜 字作畠	441	001	35度 18分 19秒	140度 15分 50秒	19950501～ 19950531	520	道路改良工事に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
女ヶ谷遺跡	旧石器時代			剝片 3	
	縄文時代			石斧	
	古墳時代 奈良時代 平安時代	堅穴住居 土器捨て場 溝	4軒 1か所 2条	土師器 纺錘車	
	中世	焼土土坑 掘立柱建物跡	1基 1基	内耳土器	
	近世	塚 土坑墓	1基 1基	寛永通寶 6 メノウ削石 1 木櫛片 1	

千葉県文化財センター調査報告第287集

大多喜町女ヶ谷遺跡

道路特殊改良県道大多喜一宮線埋蔵文化財調査報告書

平成8年3月25日発行

編 集 財団法人 千葉県文化財センター

発 行 千葉県土木部  
千葉市中央区市場町1-1

財団法人 千葉県文化財センター  
千葉県四街道市鹿渡809-2

印 刷 大和美術印刷株式会社  
千葉県木更津市潮浜2-1-10